

「動いた墓石」

(イエスの復活)

(マルコ16:1～8)

挽地 茂男

2019.10.6 日本基督教団千歳丘教会礼拝

マルコによる福音書は16章8節で終わっています。しかしこの終わり方が唐突で、しかも復活した主イエスの姿も描かれていないので、後の時代の写本には、復活の記事が付け加えられます(邦訳聖書の「結び一」「結び二」がそれです)。おまけに最後の言葉が「なぜなら…である」という接続詞で終わっているのです。8節の「16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」〔日本語訳では余り奇異に感じませんが〕研究者はこのあと復活の物語含む文章が続いていて、何らかの理由で失われたという膨大な理論を立ててきました。〕

しかし奇異であることは(かわっているという印象は)、まずはこちら側、読む側の印象でしかありませんから、与えられた本文(テキスト)を、マルコ福音書全体の主張と(付き合わせてそ)

の整合性を意識しつつ解釈する方が大切です。〔なお本文批評〔写本研究〕に興味のある方は、日本語の文献では、メツガーや蛭沼寿雄先生の著作をお読みください。これらの著作には、この箇所の詳細な議論と論証が紹介されています。〕

つまりマルコによる福音書は16章8節で——主イエスが納められた墓が空であったという「空の墓」の物語——で終わっています。この「空の墓」の物語が福音書にとどめられた目的は、これによって主イエスの復活が現実起こった出来事であることを証明することにあります。直接的に復活した主イエスの姿を描かずに、「空の墓」で終わっているという所にマルコの独特の考え方が出ているのです。マルコは初期のキリスト教が大切に伝えてきた「空の墓」に関する伝承を書きとどめました。しかもマルコ福音書全体の結びにもってきたのです。それは「空の墓」の物語がマルコ



にとって、またキリスト者にとって大切な意味を——復活も勿論大切な意味を持つわけですが——持っていると考えたからです。

空の墓の物語をすこし丁寧に読みたいと思いますが、まずこの問いから始めたいと思います。つまり「なぜ墓は空だったのでしょうか」。「あたりまえでしょう。そこに納められていた主イエスが復活したからです」とキリスト者なら即座に答えるところですが、即座に答えないところがマルコなのです。

「なぜ空だったのか。」「主イエスが復活した」という答えを仮に封印すると、いくつかの可能性が考えられます。先ず第1に、①誰かが遺体を移動させたと考えられます(マグダラのはリアは「園丁」が移動させたと考えました。ヨハネ20:15)、第2に、②弟子たちが遺体を盗んでいった。つまり、イエスが復活したという噂を流すために、遺体を盗んでいったと主張する人もいました(マタイ28:13)。そして第3に、



③そもそも墓は空だったのではなく、女たちが墓を間違えたという主張も出てきました。そして第4に、④「空の墓」のお話は、事実そうだったのではなく、初期のキリスト教が創作したお話だ、というのまで、いろいろとあります。要するに、これらの主張は皆「主イエスの復活」はなかったという点で一致します。復活などなかったのだから、墓が空であったというのは何かの人間の側の理解のずれ——無意識なずれとしての誤解か意識的なずれとしての創作(作文)である——として説明されます。悪意のない誤解か、作為的な創作か。「空の墓」の物語は、復活の有無と直結しているのです。

主イエスの葬られた墓が空であったという、「空の墓」の伝承は歴史的事実の報告だと信じて疑いませんが、聖書がそう言っているのだから「事実」だ、と言ってしまわずに、少し遠回りをして、この「空の墓」の事実性について考えてみたいと思います。「空の墓」の伝承が歴史的事実であるという主張を支持する根拠を3つ挙げておきます。先ず第1は、墓を最初に訪れて、墓が空であることを発見したのが、イエスの主要な男性の弟子たちではな

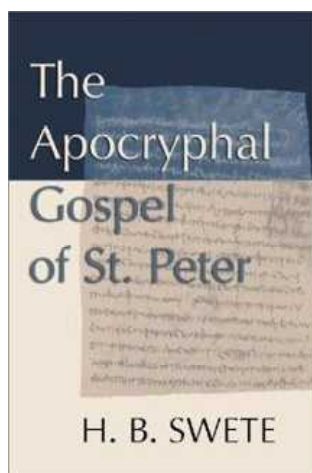
く、女性たちであったということです。復活に関するパウロの宣言、例えばコリントの信徒への手紙 15 章 3－8 節には、男性のみが登場し、女性たちに関する言及はまったくありません。一読しておきます。

一コリ 15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、15:4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、15:5 ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。15:6 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしろ、大部分は今なお生き残っています。15:7 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、15:8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

男性のみが登場します。つまり男性中心主義なのです。古代イスラエルのこの時代、重要な証言は、成人男性によってなされる証言であって、女性の証言は二次的なものとされているのです。しかしこの「空の墓」の伝承は、

男性中心主義の基準を超えています。二次的な女性の証言を取り上げているからです。創作したのなら、女性にはしなかったでしょう。ですから女性の証言であることが、逆にこの証言の信憑性を支持しているのです。繰り返しますが、この「空の墓」の物語が創作(作文)であるならば、女性の証言者を選ばなかったでしょう。

第 2 は、ペトロ福音書というペトロの名前によって書かれた福音書(外典福音書)があります。この文書の成立は上限が(最も古く見積もって)150 年頃です。この福音書の成立は150 年頃、2 世紀の半ばと見



られていますが、この福音書には、復活に関して新約聖書の 4 つの正典福音書よりもオリジナルな基礎情報が含まれていて、その基礎情報を使

って四つの福音書が書かれたと主張されてきました。〔わたしはそうに理解しません。〕このペトロ福音書を見ますと、最初に主イエスが復活して「空になった墓」を見たのは、ペトロと他の男性の弟子たちとなっています(10-11章)。そこで人々はこう考

えました。やっぱり「最初に空の墓を発見したのはペトロと他の男性の弟子たち」だったんだ。そしてこの事実を（つまり「空の墓を発見したのはペトロと他の男性の弟子たちだった」というオリジナルの情報を）、正典福音書が女性に変更したのだ、と主張したのです。これはありえないでしょう。証言の価値が高いとされる「ペトロと他の男性の弟子たち」の証言を、しかも一番弟子ペトロの証言を、証言の価値が低い「婦人たち」の証言に変更する可能性は、ないとまでは言わなくても、相当に低いと言わなければなりません。

第3に、「イエスの遺体を納めた墓が空であったのは、弟子たちがイエスのご遺体を盗んでいったからだ」という主張を取り上げておきましょう。ガリラヤのナザレから出土した「ナザレ碑文」と呼ばれる古代の碑文があります。この「ナザレ碑文」は、イエスの遺体を納めた墓が空であったのは、弟子たちがイエスのご遺体を盗んだからだという「弟子による遺体の隠匿説」に対する一つの反証（反対証明）となります。碑文の年代は紀元70年より前。カエサル（ローマ皇帝）の布告を記した碑文です。そこ

までは確実なのですが、どのカエサル（ローマ皇帝）の布告なのか、詳細な時期は確定されていません。碑文の内容は、お墓や埋葬に関するカエサル（ローマ皇帝）の命令です。この碑文は、弟子たちによるイエスの遺体の隠匿説に対する反証となると申し上げましたが、それと同時に、墓とか埋葬に関する法律の基礎になっている、当時の宗教感情についても教えてくれます。お読みします。

カエサル（ローマ皇帝）の布告。「墓——人はそれを先祖や子供たちや家のメンバーに対する敬虔な奉仕として造る——その墓（を造ること）によって人々が永久的に煩いから解放されることは、わたしの喜びである。しかしもし他人が墓を壊したとか、あるいは何か別の方法でそこに埋葬されている遺体を掘出したり、悪意ある虚偽によって遺体を他の場所に移して、そこに埋葬されている者の名誉を傷つけたり、あるいは墓石等を動かしたという情報



を、人が提示するならば、そのような場合には、わたしは裁判を起こすことを命じる。それはちょうど、彼らが死者に対する敬虔なる宗教祭儀について、神々の神意(みこころ)を大切にすることになるからである。何にもまして、埋葬された人たちの名誉を守るとは、義務とすべきである。誰も、いかなる理由であれ、その名誉を侵害してはならない。それにもかかわらず、もし誰かがそのようなことをするなら、その墓に対する強盗行為の罪に対して、わたしは死刑を科する。」

もしこの布告が、実際、主イエスの死のしばらく前にパレスチナで発布されていたのなら、復活の時点には、埋葬された遺体を勝手に処理することを禁止する厳しい法律が効力をもっていたことになります。そうであれば、ユダヤ人を恐れて、部屋に閉じこもっているような男性の弟子たちが、あえてこのような法律の禁を犯したとは、考えにくいでしょう。

それに加えてマタイ福音書によれば、主イエスのご遺体を納めた墓には番兵が配置されていました。マタイによる福音書 27章 62 - 66 節。27:62 明くる日、すなわち、準備の日〔十字架刑が執行された日〕の翌日、祭司長たちとファリ

サイ派の人々は、ピラトのところに集まって、27:63 こう言った。

「閣下、人を惑わすあの者がまだ生きていたとき、『自分は三日後に復活する』と言っていたのを、わたしたちは思い出しました。27:64 ですから、三日目まで墓を見張るように命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、『イエスは死者の中から復活した』などと民衆に言いふらすかもしれません。そうすると、人々は前よりもひどく惑わされることになります。」27:65 ピラトは言った。「あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかりと見張らせるがよい。」27:66

そこで、彼らは行って墓の石に封印をし、番兵をおいた。であれば、ユダヤ人を恐れて、部屋に閉じこもっているような弟子たちが、あえてこのような法律の禁を犯したとは、さらに考えにくいことになります。



以上のことからして、結論として最も説得的な(説得力のある)説明は、この「空の墓」の物語が、最初期の教会が実際の出来事として知っていた事実を伝えているということです。

さて、主イエスが十字架で最期を遂げたあと、アリマタヤのヨセフを中心に主イエスのご遺体を墓に埋葬する様子を、婦人たちはじっと見つめていたのです。十字架の場面の最後の部分である15章46－47節。「15:46 ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。15:47 マグダラの MARIA とヨセの母 MARIA とは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。」

彼女たちは安息日が終わるのを(週の初めの日)を待ち焦がれて



いたのです。そして待ちに待った週明け、週の初めの日、復活の朝の出来事です。16章1－3節。

「16:1 安息日が終わると、マグダラの MARIA、ヤコブの母 MARIA、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。16:2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。16:3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。」実は、先ほど紹介したペトロ福音書には、その時の婦人たちの気持ちをかなり詳細に描いています。お読みします。〔翻訳が読みづらい。〕

「さて、主の日の朝早く、主の女弟子マグダラの MARIA が——彼女は、ユダヤ人たちが怒りに燃えていたため、彼らを恐れ、婦人たちが死者のため、自分の愛する人々に対して行うことになっていることを、(埋葬の際)主の墓でしなかった——自分といっしょに友人たちを連れて、彼が安置されていた墓にやってきた。彼らは、ユダヤ人が自分たちを見ないだろうかと恐れ、そして言っていた。『あのかたが十字架につけられたあの日には、泣いたり、(胸を)打った

りできませんでしたが、せめて今、あのかたのお墓でそれをしましう。けれども、はいつてあのかたのおそばにすわり、なすべきことを行えるよう、いったいだれがわたしたちのために、お墓の入り口に置かれている石を転がしてください。石は大きく、わたしたちはだれかが自分たちを見ないかと恐れているのですから。もしできれば、あのかたの記念として持ってきたものをせめて入り口にでも納めて、自分の家に帰るまで(の道すがら)、泣いて(胸を)打ちましよう。』と」(12章)。そして墓にやってきました。ところがです。4－5節。



「16:4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。16:5 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。」

福音書記者マルコは、福音書記者の中で最も、人間の死や苦し

について行き届いた眼をもっています。マルコの視点は今日の「復活」の記事にもよく現れています。そのために、マルコの復活の記事では奇跡的な要素が最大限に抑制されています。墓の入り口を覆っていた石こそ、婦人たちが到着する以前にわきに転がされてはいませんが、①天使も登場しません。天使ではなく「若者」とされていることに注意が必要です。これを他の福音書に合わせて、天使と解釈する註解者は後を絶ちませんが、そのように無理に解釈してしまうと、マルコのメッセージの大切な部分を取り逃してしまいます。さらにこの箇所には②復活した主イエス・キリストの姿が出てきません。復活顕現が欠落しているのです。復活の一手手前で終わっている、といった印象があります。〔この欠落が不自然だとして――先ほど申しましたように――後代の写本では、復活顕現の記事が付加されています。皆さんの聖書の「結び一」「結び二」がそれです。また研究者たちは奇妙な解説を生み出してきました。〕マルコは奇跡のない日常から、復活という非日常に向かって行きます。その若者

のメッセージ。6－7節。

16:6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。16:7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。

『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」



復活の主にお会いできるのは、エルサレムではなく、ガリラヤだということです。他の三つの福音書（マタイ、ルカ、ヨハネ）では、主イエスはエルサレムで復活の姿を弟子たちに現します〔マタイとヨハネはエルサレムとガリラヤの両方〕。ガリラヤで主が復活の姿を現すという、いわゆる「ガリラヤ顕現」と呼ばれるこの記事によって、マルコの背後にはガリラヤを拠点とするキリスト教の「ガリラヤ教団」があり、エルサレムを中

心とするキリスト教「エルサレム教団」と対立していたと推定する神学者もでてきました〔ex.田川建三〕。しかしそれは、あまりにも歴史的推測でこの文言を処理しすぎているのです。まずは、もう少し素直にマルコの全体に照らして読まなければなりません。

ガリラヤ。14章に次いで再びガリラヤです。14章28節で主イエスはこう言われたのでした。

「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」。主イエスと弟子たちにとって「ガリラヤ」とは何だったのでしょうか。ガリラヤは弟子たちの信仰が始まった場所でした。またガリラヤは弟子たちが初めて主イエスに出会った場所でした。そしてガリラヤで再び、彼らがイエス・キリストに出会うとき、主は再び「わたしについてきなさい」と言われるでしょう。そこから再び始まるということです。わたしたちは、先にガリラヤに行って弟子たちとの再会を待つ、主イエスの心境を、「放蕩息子の父親」に託して推測し理解しようと試みました。親を捨て、故郷を捨て、罪と放蕩に明け暮れて、分与された父親の財産も湯水

のごとく使い果たし、豚の餌で自分の腹を満たそうとすほどの落ちぶれた敗残者となった息子を待つ父親の姿に象徴させて、罪人の帰りを喜ぶ神とそして主イエスの姿を、この譬えは教え、ルカはそれを福音書に書きとどめたのです。十字架上の主イエスを見捨てた者であっても、その信仰の原点から再び始まるのです。「わたしについてきなさい」と言われる時、その主は、そこではもう復活の主なのです。わたしたちは繰り返しわたしたちの信仰のガリラヤに帰るのです。新約聖書で「復活」を表す言葉の一つに〈アナスタシス〉（ἀνάστασις）というギリシア語があります。言葉の元々の意味は「再び立つ／立ち上がる」という意味です。主イエスは再び立たれたのです。弟子たちも、再び立ち上がるのです。そしてわたしたちも、再び立ち上がるのです。キリ



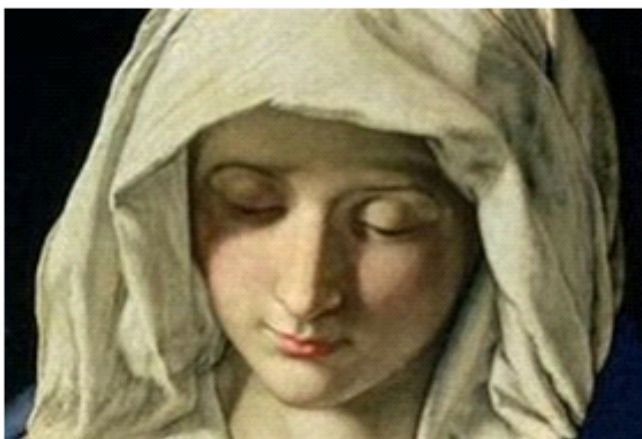
スト教は主イエスの死でドンと突き当たったところ、ドンと行き詰まったところから始まる宗教なのです。「行き止まり」は英語で言えば Dead End。死はふつう何事においても終わりを意味します。しかしキリスト教は、主イエスの死から、また彼の葬られた墓の中から新しいメッセージを語る宗教なのです。先週のコロサイの信徒への手紙の言葉を覚えておられるでしょうか。3章1節。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いております。」

マルコ福音書は、復活の直前で終わっています。寸止めのような状態になっています。まだ復活の主にお会いしてはいないのです。若者から、復活のメッセージを受けた婦人たちの反応です。8節。

「16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。マグダラのマリアを含む婦人たちが、イエスの墓で告げられた復活のメッセージは、彼女たちの

心にすぐに喜びをもたらしたのではないことがわかります。むしろそれは、彼女たちの心の平衡を奪い、彼女たちを沈黙のうちに押し込んだのです。イエスの死と復活を中核とする福音のメッセージは、単に喜びのメッセージではありませんでした。すくなくともマルコ福音書では、単純に歓喜をもたらすメッセージとは考えられてはいないのです。それは喜びのメッセージではあっても、恐れと動揺と沈黙という堅い殻に覆われたメッセージなのです。

やがてこの沈黙が破られることを、わたしたちはすでに知っています。でなければ世界に、そしてわたしたちに福音が届くことはなかったからです。しかし今一度、復活のメッセージが大いなる勝利の喜びとして語り出される前に、それを覆っていたこの沈黙の意味



をかみしめてみたいと思います。沈黙は決して無意味ではありません。沈黙は真実な人間態度の内の1つです。沈黙の卵を温めたいと思います。

沈黙はやがて出会いによって破られます。今は、その沈黙の中に主イエスの言葉が響きます。逮捕の直前に語られた言葉です。「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(14:28)。そして今再び若者の口を通して繰り返されたメッセージです。「あなたの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」(16:7)。今弟子たちを導く道しるべは、この言葉でした。その言葉だけでした。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(12:30)。これではありませんでした。こんなことは出来そうにもありません。「隣人を自分のように愛しなさい」(12:31)。そんなことは出来そうにもありません。ただ主イエスのおられる所に、心に向けて一步を踏み出すことだけでした。そこにはわたしたちを待つ方がおられるのです。出

会いはわたしたちに言葉を与えます。それは「出会い」のもつ不可抗的な力の結果なのです。人は自らならぬ出会う対象によって、自らの言葉を引き出されます。沈黙は言葉へと、宣教へと連絡します。

わたしたちはわたしたちの信仰の原点に帰る時、いやそこに初めて至るときも、そこに生きておられる主を見出すのです。その時に向かって真実な沈黙は充満します。しかしそれは、やがて破裂するのです。わたしたちは、み言葉なる方を見出すのです。言葉そのものである方を見出すのです。「主は生きておられる。」そしてその時、その出会いに促されるように、自分の口から言葉を発するのです。

今日で、四年半かかりましたマルコによる福音書の講解説教が終了です。あのペトロの手紙を読んで終わりたいと思います。ペトロの手紙―1章3―9を一部は端折ってお読みします。

…神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え…てくださいました。…

…1:8 あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。1:9 それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

お祈りしましょう。

2019.10.6 日本基督教団千歳丘教会礼拝



16:1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。

16:2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。

16:3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。

16:4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。

16:5 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。

16:6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。

16:7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去

った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

16・1 Καὶ διαγενομένου τοῦ σαββάτου Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ καὶ Μαρία ἡ (τοῦ) Ἰακώβου καὶ Σαλώμῃ ἡ γόρασιν ἀρώματα ἵνα ἐλθοῦσαι ἀλείψωσιν αὐτόν.

16・2 καὶ λίαν πρωὶ τῇ μιᾷ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.

16・3 καὶ ἔλεγον πρὸς ἑαυτάς, Τίς ἀποκυλίσει ἡμῖν τὸν λίθον ἐκ τῆς θύρας τοῦ μνημείου;

16・4 καὶ ἀναβλέψασαι θεωροῦσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος· ἡ γὰρ μέγας σφόδρα.

16・5 καὶ εἰσελθοῦσαι εἰς τὸ μνημεῖον εἶδον νεανίσκον καθήμενον ἐν τοῖς δεξιοῖς περιβεβλημένον στολὴν λευκὴν, καὶ ἐξεθαμβήθησαν.

16・6 ὁ δὲ λέγει αὐταῖς, Μὴ ἐκθαμβεῖσθε· Ἰησοῦν ζητεῖτε τὸν Ναζαρηνὸν τὸν ἐσταυρωμένον· ἡγέρθη, οὐκ ἔστιν ὧδε· ἴδε ὁ τόπος ὅπου ἔθηκαν αὐτόν.

16・7 ἀλλὰ ὑπάγετε εἶπατε τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ καὶ τῷ Πέτρῳ ὅτι Προάγει ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν·

ἐκεῖ αὐτὸν ὄψεσθε, καθὼς εἶπεν ὑμῖν.

16·8 καὶ ἐξελθούσαι ἔφυγον ἀπὸ τοῦ
μνημείου, εἶχεν γὰρ αὐτὰς τρόμος
καὶ ἔκστασις· καὶ οὐδενὶ οὐδὲν
εἶπαν· ἐφοβοῦντο γάρ.